ＦＣＴ第19回メディア・リテラシー研修セミナー報告
～メディアが語る「世界」ってナニ？～

2000 年より継続して開催しているメディア・リテラシー研修セミナーを、昨年同様、大阪教育大学メディア・リテラシー研究会の共催を得て、大阪教育大学天王寺キャンパスで、2016 年 8 月 20 日（土）～21 日（日）におこないました。

参加者は大阪府や京都府などの関西圏を中心に、青森県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県などからも集まり、所属も大学生・大学院生、各種教員、ＮＰＯ関係者など幅広い構成となりました。このように地域も年齢もさまざまな参加者によるセミナーは、今後のメディア・リテラシーの地域での実践に繋がる事業であると確信しています。

● セミナーの概要

1 日目

セッション１（Ｓ１）「私・私たちのメディア史」は、子ども時代のメディアとの関わりを各自が記入シートに書き、グループでもちより、メディア接触やメディアに対する意識に類似点、相違点があるのかなど、時代背景を視野に入れて、話し合うワークショップです。メディア・リテラシーの入り口となる活動ですが、メディアは個人的なものではなく、社会的なものであるということに気付くことができました。

Ｓ２「メディア・リテラシーを学ぶ①～メディア・リテラシーとは何か～」では、『最新 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』第１章より、メディア・リテラシーの定義、８つの基本概念、メディアの研究モデル、メディア・リテラシーの分析、学びのスタイルなどについて講義形式で、解説をおこないました。

Ｓ３「ＣＭで学ぶ映像言語」は、基本概念７（メディアは独自の様式、芸術性、技法、きまり、約束事をもつ）を体験するワークショップです。テクストはブリジストンの企業ＣＭ『Chase Your Dream』で、「映像言語分析シート」に記入し、ＣＭに使用されている映像言語、音声技法、全体の構成について分析をするセッションです。

Ｓ４「ＣＭが提示する価値観」では、まず、動画分析ソフト「VVCex」を活用し、各自が映画の予告編を観ながら、映像言語を時系列に並べた分析シートをパソコン上で作成しました。使用したテクストは映画『予告犯』の予告編です。その後、使用されている映像言語を元に、登場人物や、予告編としてのストーリーに、どのような意味を作り出しているか、また、実際のできごとや社会的風潮との関係性について話し合いました。

２日目

Ｓ５「メディア・リテラシーを学ぶ②～小学生から始めるデジタル時代のメディア・リテラシー～」は子どもに特化して、何歳ごろからメディア・リテラシーを身につける活動ができるのか、という問題意識でのメディア・リテラシーの講義です。ルネ・ホッブス、デビット・クーパー・ムーア著、森本洋介他訳『メディア・リテラシー教育と出会う―小学生がデジタルメディアとポップカルチャーに向き合うために』を中心に解説

されました。
　Ｓ６「ニュースバリューを考える」はニュースバリューについて、ターゲット・オーディアンスに特化して考えるワークショップです。夕方のニュース番組を想定し、グループごとに、①日本の学生、②サラリーマン、③海外在住日本人、④主婦、⑤日本にいる留学生、というターゲット・オーディアンスを決め、ニュースリストから３大ニュースを選び、話し合いました。参加者からは「ターゲット・オーディアンスに関する編集者のステレオタイプな考え方により、発信される情報が偏るのではないか」とか、「現実のオーディアンスは多様である」などの意見が出ました。
　Ｓ７「ニュース報道における『現実』の構成」では、５月 27 日のオバマ大統領広島訪問のニュースを分析しました。まず、ＮＨＫ『ニュース７』とテレビ朝日系『報道ステーション』のニュース番組の構成を、配布資料をもとに類似点や相違点を出し合い、その根拠となる背景も話し合いました。その後に、『報道ステーション』の映像をテクストにして、ニュースに取り上げられる登場人物の分析を行い、ニュース番組がどのように「現実」を構成するのかを話し合いました。
　Ｓ８「私たちのニュースをつくろう」では、Ｓ７で分析したマスメディアのニュース分析からの展開として、オバマ大統領広島訪問のニュースを、参加者が自ら企画するセッションです。時間量は５分間、ターゲット・オーディアンス、登場人物、オバマ演説の部分使用などさまざまな選択を考え合わせて構成します。あるグループは、若い世代に向けて最後に学生キャスターが「…私たちがもっている歴史の知識を点から線にすることで、いま起きている“謝罪”についての論争に、自分の意見をもてるようになるのではないでしょうか」とコメントする構成になっています。

● セミナー参加者の感想より
・「…実際にＣM分析や映像分析などをしてみると、メディア・テクストには短い時間で大量の記号が埋め込まれていることが実感できた。そのような活動は正直なところ体力を必要とするが、一方的にメディア・テクストを受容するよりも、豊な意味を創りだすという点で、とても楽しい活動だった」（20 代男性）
・「…私はこれまでクリティカルに分析することを心がけてきたけれども、学びを共有したり、共に一つの作品を作ったりという経験は少なかったので、これからもっとそういう機会をもっていきたいなと感じています。インタネットを対象としたメディア・リテラシーの講座にも関心があります」（30 代女性）
・「…忙しい、忙しいと気がつくと、いろいろな感覚を閉じてしまって、立ち止まって考えることを忘れてしまっているようです。メディア・リテラシーとは、自分たちの社会のありようを、自分の生き方を見つめ直し、思考回路をオープンにして、活性化することなのだと思います。それは、決して一人ではできるものではなく、他者とのコミュニケーションを通して得られるものなのだと思います。…」（50 代男性リピーター）

● 今後に向けて

昨年同様、大学生など若い世代の参加者が増えていますが、異なる世代とのワークショップでの話し合いは、さまざまな考えに出会える貴重な機会となりました。

今後の展開として、参加者（教員）の感想にもみられましたが、授業で使用する映像のテクストの開発を、日常的に進めることができるようになれば、学校教育の場でもメディア・リテラシーの取り組みがしやすくなると考えられます。そこで、テクスト開発のためのネットワーク化が課題であると改めて感じました。

最後に、共催の森田先生はじめ大阪教育大学メディア・リテラシー教育研究会の皆様に感謝申し上げます。

ファッシリテーター：西村寿子、高橋恭子、田島知之、森本洋介、藤井玲子、齋藤綾乃、小畑桃子

記録：新開清子